

マウスの断眠モデルによる ゼラニウム精油の抗酸化作用の検証

株式会社セラ 町田 久

私どもでは治療院の中でアロマセラピーを行っていますが、一方セミナーなどではエステ、美容関係の方を対象にアロマセラピーの理論、実技指導をする場合が年々多くなっています。治療、美容面でも特に効果が早く、目に見えて出てくる精油がゼラニウムで、精油の中では一番人気です。治療面では関節痛、リウマチそしてガンなどの免疫が落ちている人に特に使用します。又、美容面ではバラのような甘い香りが伴って、皮膚がきめ細かくなり、ハリやツヤが出てきます。アトピー性皮膚炎にも欠かせません。

アロマセラピーでの治療を始めて20年経ちますが、特に関節炎の患者さんがゼラニウム精油を使って急速に良くなっていったことが、ゼラニウムに注目したきっかけでした。

その50歳代の女性はある薬の副作用からリウマチのような症状が出ていました。手足の関節の腫れがひどく、普通より倍は腫れていました。痛みもひどく、歩行困難で殆ど2年間寝たきりの生活でした。膝に人工関節を入れないと全く歩けなくなると言われていました。息子さんに連れられて来院してからは、週1回松葉杖でいらっしゃいました。何時も寒がり、足先の感覚はほとんどありませんでした。1年で松葉杖から開放され、2年目で腫れ、痛みがすっかり治まり、鉄の棒のような筋肉に弾力が出てきました。今では一人で車を運転して通われていますし、年に何度も一人で海外にも出かけていらっしゃいます。

ゼラニウムの炎症に対する作用は、帝京大学医真菌センターの安部教授が発表されています。炎症反応はマクロファージの活性→TNFなどのサイトカインの産生→好中球などの集積と活性化→炎症の増悪・持続を、また、活性酸素・ロイコトリエン・プロスタグランジンによる発赤・腫脹を作り出します。その炎症反応のほとんどのところをゼラニウムが阻止してい

くことを明らかにしています。これを見るとゼラニウムが関節炎から皮膚炎まで幅広く効果をもたらすのがわかります。

今回札幌にある、株式会社アミノアップ化学の生物化学研究室にゼラニウムの機能試験を依頼しました。同社はバイオ技術によるサプリメントを開発し、免疫を賦活するAHCC (Active Hexose Correlated Compound) などの研究、製造をしている会社です。以下がその概要です。

試験の背景、目的

マウスモデルを使用して、断眠によるストレス負荷を掛けると、ヘルパーT細胞の1型(Th1)と2型(Th2)のバランスが崩れることが予想されますが、ゼラニウムを使うことでこのバランスの崩れがどのように変化するかを検討しました。

免疫とは感染症から免れるための一連の生体防御機能をさしますが、その機能の基本は単に感染症に対する抵抗力として捉えるだけではなく、自己と非自己を識別して、非自己から自己を守ることにあります。

免疫は体液性免疫と細胞性免疫とに分けられます。体液性免疫は微生物由来の異物、広くは非自己を抗原といいます。その抗原を抗体(タンパク質)が捕まえていく働きです。抗原をマクロファージが捕食し、ヘルパーT細胞に提示し、ヘルパーT細胞はB細胞に刺激を与えて、B細胞が抗体を作って抗原を捕まえていきます。

それに対して細胞性免疫は、抗原によらないで、非自己に対してマクロファージの捕食能力を高め、ヘルパーT細胞に提示し、インターロイキン-2,12、インターフェロン- γ 、TNF- α などのサイトカイン(細胞間の伝達物質)を介し、NK細胞(ナチュラルキラー細胞)、